
山葉寅楠と鈴木政吉

——明治期の博覧会とのかかわりを中心に

井上さつき 愛知県立芸術大学音楽学部教授（音楽学）



山葉寅楠



鈴木政吉

0. はじめに

オルガンやヴァイオリンなどの日本の洋楽器生産は 1887（明治 20）年ごろ、ようやく緒に就いたが、1904（明治 37）年に発行された東京商業会議所編纂になる『保護政策調査資料』をひもといてみると、その時点ですでに、オルガン、ヴァイオリン共に国産品が輸入品を完全に抑えていたことがわかる。この『保護政策調査資料』は、国内産業を保護奨励する政策の提言のため、全国の商業会議所の連合会が調査を行なったもので、「楽器」の調査を担当したのは、東京の服部金太郎（1860-1934、時計メーカー、セイコーの創業者）であった。彼は楽器の需用の状況について、一般西洋楽器の需用が 5、6 年前迄は主として学校用だったものが、近年では「音楽に関する思想の発達に伴い」楽器の需用が増加して、家庭の必需品と認められるようになってきていること、オルガンに関しては、輸入は途絶し輸出も多少あること、ヴァイオリンに関しては上等品を除けば概して内地製造品が使用されるようになってきていることを述べている。

当時、洋楽器生産をけん引していたのは、現在、世界一の楽器メーカーとなっているヤマハの創業者、山葉寅楠（1851-1916）と鈴木ヴァイオリンの創業者鈴木政吉（1859-1944）である。二人は国内外の博覧会で高い評価を受ける常連だった。本稿では、この二人と博覧会のかかわりを軸に、明治日本における洋楽器生産の発展をたどってみたい。

1. 山葉寅楠とオルガン

山葉寅楠は幕末の1851（嘉永4）年、紀州藩士山葉正孝の次男に生まれた。父正孝は藩の天文係で、地図の作成や橋の架設、からくり人形の考案などに、すぐれた才能を示したが、寅楠は乱暴者に育ち、ついには勘当の身となって、1868（明治元）年、17歳で大阪に飛び出す。そこで時計商の徒弟となり、1871-72（明治4-5）年には長崎で時計製造を学ぶ。その後、大和高田に西洋医療器械師を兼ねた時計商の店を出したもののうまくいかず、その後は医療器械師や時計師を兼ねた渡り職人として各地を遍歴していた。

その途中、浜松にやって来た寅楠は、医療器械の仕事を通して、浜松病院長福島豊策と知り合いになる。そして、元城小学校の舶来オルガン（アメリカのメーソン・アンド・ハムリン製）が故障したときに寅楠に修理の声がかかった。社史によれば、1887（明治20）年7月のことであった。

機械の修理ならお手のもの。寅楠は苦も無くオルガンを修理し、そこで、自分でオルガン製造すれば金になるとオルガン製造を志した。その際、仕事場、資金、技術すべてを提供して手伝ったのが、^{かざり}鋳職、つまり、金属工芸職人の河合喜三郎であった。

・小学校のオルガン

その昔、小学校の音楽の授業は「唱歌」と言われていた。では、「唱歌」がいつから授業科目になったかといえ、1872（明治5）年、日本に近代的な教育制度が初めて敷かれたときに、すでに科目に入っていた。外国の制度を参考にしたからである。そこでは、小学校に「唱歌」、中学校に「奏楽」がそれぞれ教科のひとつに置かれていたが、いずれも「当分これを欠く」というただし書きがついていた。実際には唱歌を教える教師もいなければ教材もない。外

国人宣教師によるミッションスクールでは、明治初期からオルガンを用いた賛美歌教育が始まっていたものの、公教育の場ではどの学校でも音楽は教えられていなかった。

1879（明治 12）年、文部省に音楽取調掛^{おんがくとりしらべがかり}が作られた。1887（明治 20）年、東京音楽学校になり、戦後、東京藝術大学音楽学部になる組織だが、これは単なる学校ではない。その名のとおり西洋音楽を「取り調べ」て学ぶべきところは学び、新しい日本の音楽を創ろうとしていた。ここで唱歌は試行錯誤しながら作られていった。

こうして、1882（明治 15）年、音楽取調掛編の初の『小学唱歌集』が発行され、しだいに小学校で唱歌の授業が行なわれるようになった。特に、1886（明治 19）年 5 月の文部省令で小学校の唱歌は「単音唱歌複音唱歌」と指示されたことは影響が大きく、それを受けて、全国の公立小学校で徐々に唱歌教育が開始された。

音楽取調掛が唱歌教育に一番に勧めたのは、オルガンである。オルガン（風琴）は「音調の狂いきわめて少なく、学校唱歌の教授にはもっとも適当にして、かつ習いやすいもの」という評価であった。取調掛はオルガンやピアノがない場合には、代用楽器として、箏と胡弓を使うように地方に指示し、実際に、唱歌教育用に、箏と胡弓の改造楽器も試製している。

しかし、取調掛の努力にもかかわらず、地方からの改造胡弓に対する注文はオルガンに比べずっと少なかった。そのうち、オルガン製造が軌道に乗ると、箏や胡弓のことはまったく話題に上らなくなり、やがて、音楽取調掛は東京音楽学校となり、一層洋楽に軸足を移すようになった。

浜松の小学校にオルガンが導入されたのは以上のような経緯があった。

アメリカ製のオルガンの修理をきっかけに、河合喜三郎と共に 1 台のオルガンを作り上げた寅楠は、東京音楽学校に楽器を持参し、「審査」を受けることになった。記念誌によれば、寅楠はこれを浜松の学校当局に見せ、次いで静岡師範学校にも持参して意見を求めたが、十分な批評を得られなかったので、東京音楽学校にもっていったという。

その第 1 号の試作オルガンを、寅楠と河合喜三郎は天秤棒に担ぎ、箱根の山を越えて徒歩で東京まで運んだというエピソードは有名だが、これはあやしい。

浜松の港から船で運ぶなど、ほかにも交通手段はあった。

唱歌教育を普及させるために、国産楽器が早く製造されることを望んでいた伊澤は、音楽学校で楽器を鑑定することをそれまでにも行なっていた。何しろ、輸入楽器は高価だった。不平等条約の制約があり、船賃や多額の手数料を入れると、楽器は現地価格の2、3倍になってしまう。輸入超過で外貨不足に悩んでいた明治政府にとっては、大問題である。そこで、伊澤修二は、日本在来の楽器を教育用として改良するか、オルガンやヴァイオリンを模造するか、ふたつの案を考えたが、日本在来の楽器の改良はまったく人気がなかった。そこで、1881（明治14）年3月、お雇い外国人メーソンがもっていた2台のオルガンを買い上げ、1台は授業用、損傷していたもう1台は解体して構造研究を行い、同年11月には取調掛から才田伊三郎にオルガン製作を注文している。さらに、1884（明治17）年には、松阪長尾オルガンが音楽取調掛の「試験」に合格していた。伊澤修二は、当時、黎明期にあった国産楽器メーカーを積極的に手助けしていたのである。

寅楠が東京音楽学校にオルガンを持ち込んだときの様子を、当時学生で、試験に参加した鈴木米次郎（1868-1940、東洋音楽学校（現東京音楽大学）の創始者）は次のように書いている。

日本でオルガンが出来たと云うので、見た所が、立派なものが出来て居た。……総ての塗りが漆の黒塗りで中に金の蒔絵があつて鳳凰の絵なんか描いてある。よく見るとオルガンが仏壇のような気がした。……体裁は非常に好いのですが、弾いて見る音色が笙の音と同じ様です。……私共書生のことですから四五人も居りましたが寄ってたかっていろいろな酷評を致しました。

ちなみに山葉はこの後、漆塗りで蒔絵をほどこしたピアノを作り、博覧会で評価されることになるが、そのアイデアは最初にオルガンを作ったときから使われていたわけである。

ただし、このとき、伊澤修二が出した結論は、「体はなせども、調律不備にして使用に耐えず」であった。伊澤は寅楠に、東京で勉強していくように勧め、

寅楠は1か月間、調律を勉強した。1か月で一体まともな調律ができるようになるものだろうか。このあたりも考えるべき問題があるが、ともあれ、浜松に帰った寅楠は、再びオルガン製造にチャレンジし、第2号を東京音楽学校に持参。今度はめでたく合格となった。ここから山葉寅楠のオルガン製造の快進撃が始まる。

・ 共益商社

試作第2号のオルガンが音楽学校で認められた山葉寅楠は、早速伊澤修二の紹介で、銀座の書籍・楽器商の共益商社に渡りをつけ、社長の白井練一と販売契約を結んだ。共益商社の楽器部は銀座竹川町（現在の銀座七丁目、ヤマハ銀座店）にあった。当時の共益商社の扱い商品は輸入の高価な楽器のみで、白井練一は低価格の国産品の出現を待望していた。オルガンやピアノについては、すでに横浜の西川虎吉が製造に成功していたが、西川の製品は銀座2丁目の博文本社という代理店があり、博聞本社を通じて全数が販売され、共益商社の手にはまったく入らなかった。したがって、山葉が訪ねてきたことは、共益商社にとって渡りに船であった。

さらに、山葉は白井の紹介で、大阪の大手書籍商三木佐助とも同じ契約を結んだ。三木佐助の大阪開成館はのちに三木楽器店となり、現在は三木楽器株式会社として続いている。

白井と三木は全国の教科書専売を二分する東西の元締めだった。したがって、両社が握る全国の販売ルートはそのまま山葉オルガンの販売ルートになり、また、寅楠は彼らの前貸しを受けつつ、生産に専念できる体制を早くに確立することができた。

この白井、三木、山葉寅楠による「三者協約」によれば、東（加賀、越前、美濃、伊勢国以東）は白井練一、それよりも西は三木佐助が販売し、山葉は遠江、伊豆、駿河（つまり静岡県）に限り直接販売ができるという内容だった。地域の読み方が県名ではないところが時代を感じさせる。卸値は定価の3割引きだった。

この翌年、名古屋の鈴木政吉がヴァイオリンに関して、同種の契約を白井、三木と結ぶことになり、寅楠と政吉との間に接点ができるのである。

2. 鈴木政吉とヴァイオリン

一方、鈴木政吉は山葉寅楠の8歳下で、1859（安政6）年、名古屋の旧宮出町で尾張藩士鈴木正春の次男として生まれたが、長男が夭折したため、政吉が家を継ぐ立場にあった。音曲好きの正春は内職として箏や三味線作りをしており、明治維新後はこれを家業として店を開いた。政吉はその店を継ぎ、彼の名は三味線の名工として知られるようになった。しかし、1884（明治17）年、父が没した後は、不景気で生活は苦しくなるばかり。苦境を逃れる道を探していた政吉が思い立ったのが、小学校の唱歌教師への転身だった。

当時、各地の小学校で唱歌の授業が行われるようになってきたが、教える先生が足りないので、箏でも三味線でも音楽の心得がある人は簡単に唱歌教員になることができた。政吉は、その職をねらったのである。そのため彼は、愛知県尋常師範学校の助教諭のかたわら唱歌教員の育成を行っていた恒川鏝之助のところへ通い始めた。恒川は尾張藩の楽人の家に生まれ、音楽取調掛で府県派出伝習生として学んだ人物だった。

政吉は恒川の塾で、同門の甘利鉄吉が横浜から買ってきた日本製のヴァイオリンを初めて目にした。政吉は一晩だけの約束で楽器を借り受け、徹夜で寸法を取り、第1号を試作した。出来上がったのは、1888（明治21）年初めのことである。この楽器は手元に実物がなく作った「ヴァイオリンもどき」であったため、買い手がつかず、現在まで鈴木家の家宝となっている。

その後、恒川が買った日本製のヴァイオリンの修理を頼まれた政吉は、一日で済む修理に三日もかけて、その間に現品を手本として新しくヴァイオリンを作った。今度は売り物になるヴァイオリンに仕上がり、20個くらいはたちまち売れた。

数か月後、岐阜県尋常師範学校に舶来のヴァイオリンが入ったと聞いた政吉は、自作をもって乗り込み、「一騎打ち」を試みるも、結果は惨敗。おそらくドイツ製の楽器であったと思われるが、政吉は楽器の用材が日本では入手不可能だと考え、一度はヴァイオリン製作をあきらめようと考えた。

しかし、彼はヴァイオリンの製造を自分の天職としなければならない、と決意して、三味線店を廃業し、背水の陣を敷いた。各地でヴァイオリンを手がけていた和楽器職人の中で、これほど思い切って、和楽器製造と縁を切った人物

は見当たらない。みな、和楽器製造のかたわら、副業でヴァイオリンを作っていた。ヴァイオリン一筋に賭けた政吉と、太刀打ちできるはずがなかった。

そこから、ヴァイオリン生産が軌道に乗るまでは苦労の連続だったが、ともあれ、ようやく自信のある作品ができるようになったところで、政吉は旅費を工面して1889（明治22）年5月、東京へと赴いた。目的は自作の楽器を音楽学校の教師に「鑑定」してもらうこと、そして楽器の販路を確立することであった。新しくできた東海道線を使つての旅だった。

政吉がヴァイオリンを携えて向かった先は上野の東京音楽学校。彼は愛知県尋常師範学校の新任の唱歌教師、岩城寛の紹介で、校長の伊澤修二に面会したところ、伊澤は外国人教師ルードルフ・ディットリヒに試奏するように頼んでくれた。お雇い外国人のディットリヒは「東京市内にも二、三か所で製作して居るがこの品には到底及ばない。和製品としては今日第一位を占むるものである」と賞賛した。一発合格である。

大いに勇気づけられた政吉は銀座の共益商社の楽器部に足を運ぶ。白井社長にヴァイオリンを見せると、「あなたの方で幾種できますか」という。問われた政吉は、実際には一種類しか作っていなかったのだが、そうは言えないので、「三種拵えております」と返答。名古屋に帰ると、三種の見本を作り、共益商社に送った。その結果、関東は共益商社が一手販売を引き受け、白井の紹介で、同年8月には大阪の三木佐助とも同じ契約を結んだ。この白井、三木、鈴木政吉による「三者協約」によれば、東（加賀、越前、美濃、伊勢国以東）は白井、それより西は三木が販売し、政吉は愛知県内に限り直接販売ができるという内容だった。

つまり、鈴木政吉は1年遅れで、山葉寅楠と同種の「三者協約」を、白井、三木と結び、彼らの前貸しを受けつつ、生産に専念できる体制を確立したのである。

・二人の交遊

山葉寅楠と鈴木政吉は、同じ共益商社が関東以東の売りさばき所であったところから東京で時々顔を合わせるようになり、親しくなっていっただけ。その友情は寅楠が1916（大正5）年に亡くなるまで続いた。

政吉は1936(昭和11)年、座談会で山葉寅楠の思い出を語っている。この年、77歳を迎えた政吉だが、話は明晰である。彼は、寅楠がオルガンとヴァイオリンはほとんど兄弟同士であるところから「お前は俺の弟であると思っている」と言って親切にしてくれたこと、政吉も「真の兄のような心持ちで、そうお目にはかからんけれども、随分親しく思っておつきあいをしておった次第でございます」と語り、こんなエピソードを紹介している。

1891(明治24)年か1892年(明治25)年ごろ、政吉は浜松の山葉寅楠の家を訪れた。よもやま話の中で、寅楠が数え18歳の若さで大阪に出たときに、饅頭屋の売れ方に目をつけて、その秘訣を尋ねて聞き出したというエピソードを政吉は聞き、寅楠の非凡さに敬服した。そのとき寅楠は政吉に、「お互い新事業をやる以上は、こういう薄利多売主義をどうしても十分に研究をし、勉強しなければならん。お互い大いにその方針でやろうじゃないか」と政吉に勧めたという。実際、寅楠と政吉は、ともに、明治時代、新しいビジネスモデルを積極的に取り入れて、西洋楽器産業を発展させるよう努力した。

二人を同業他社から際立たせているのは、その起業家精神であり、そのバロメーターともいえるのが、博覧会への積極的な参加であった。ヤマハの鍵盤楽器と鈴木^{アントレプレナード}のヴァイオリンは、競うようにして、国内外の博覧会に参加し、数々の賞を受賞していく。

3. 博覧会での相次ぐ受賞

・第3回内国勸業博覧会(1890年)

山葉寅楠と鈴木政吉がそろって受賞し、その名を挙げた最初の博覧会が、第3回内国勸業博覧会である。

明治政府は欧米列強の脅威に対抗するために、富国強兵を国の基本方針として殖産興業政策を展開し、欧米から技術を摂取して急ピッチで工業化を推進しようとした。そこで採用されたのが博覧会事業だった。明治政府は1873年のウィーン万博と1876年のフィラデルフィア万博に参加して、博覧会の有用性を実感し、日本においても博覧会を開催することにした。それが、内国勸業博覧会で、万博を日本向けにアレンジし、国内規模に縮小して開催されたものであった。1877(明治10)年、日本で第1回の内国博覧会が開かれ、その後、

内国勸業博覧会や府県連合共進会は、ほとんど国家的行事ないしは農商務省の最重点政策のひとつとして重要な意味をもった。

第3回内国勸業博覧会は、1890（明治23）年3月26日、上野公園で開会式が行われ、7月31日の閉会までの122日間の会期中に、102万人あまりの入場者を集めた。この博覧会は、明治日本の洋楽器製造業にとって、画期的なイベントとなり、全国の業者が一斉に出品した観があった。たとえばオルガンについては、北は宮城県宮城郡塩釜町から、南は大阪市西区に至るまで、16人が出品した。そのうち最高の2等有功賞を得たのは浜松の山葉寅楠であり、3等有功賞に横浜の西川寅吉と浜松の河合喜三郎（協賛人・山葉寅楠）が入っている。山葉寅楠はこの受賞によって、先行していた西川を逆転して全国のオルガン業者に対して優位に立った

ピアノで受賞したのは西川と山葉で、西川が2等有効賞、山葉が3等有効賞である。実は、山葉のピアノはこの博覧会に合わせて、内部一式の部品をモートリー商会から輸入して、木工による外部の箱の部分は自社で作り、それを組み立てて、山葉ピアノとして出品した。山葉に勝った西川のピアノにしても、主要部品の多くは外国からの輸入品であった。純粋に国産といえるピアノが誕生するまでにはまだ時間を要した。ヴァイオリンの部門では、創業から日の浅い鈴木政吉の楽器が最高位の3等有功賞を得た。

博覧会の審査報告には、西洋楽器について、ピアノ、オルガン、ヴァイオリンの三種が多く出展されたこと、西洋楽器製作は日本において明治17年から開始されたので、出品者の数も多いとはいえないが、その割には、良好のものができていると評され、山葉寅楠のオルガン、西川寅吉のピアノはその代表だとされている。

しかし、次のような苦言を呈してもいる。それは、「西洋品の模造の楽器は西洋で製作された物と比較せざるを得ないが、西洋の中等品と比べてなおかつ劣るところがあることは遺憾である。外形は西洋の上等品に遜色ないが、実地の使用においては西洋の中等品よりも劣る。要点を理解していないため、外形のみ模している。実業教育を進め、学力知識を増やさなければ、到底上等品の学術品は造れない」というもので、外形だけ真似できても、中身がともなっていないということだった。

報告書を読むと、第3回内国勸業博覧会の楽器の審査は、当時としてはかなりの水準にあったといえよう。山葉受賞のポイントは、品質が良く、音色が温雅であることに加え、創業から日が浅いにもかかわらず、盛んに生産し、販路を拡張したことで、このままいけば、オルガンの輸入を防ぐに至るだろうというところにあった。

実際、ここで得られた褒賞は価値があり、山葉寅楠のオルガンやピアノ、鈴木政吉のヴァイオリンが高位に入賞したことは快挙であった。特約店である共益商社はこの受賞を最大限に利用して、早速広告を打ち、山葉のオルガンや鈴木ヴァイオリンを売った。博覧会が終わって間もない9月に創刊された『音楽雑誌』には、山葉のオルガンが「皇国多数ノ風琴出品中第一等ノ賞ヲ得タリ」と書かれている。実は「一等賞」ではないのだが、出品中一番、ということである。鈴木ヴァイオリンも翌年2月号の『音楽雑誌』に同じ体裁の広告を載せ、こちらも「皇国多数ノヴァイオリン出品中第一等ノ賞ヲ得タリ」と誇らしげに宣伝した。こうして、山葉寅楠と鈴木政吉はこの先、国内外の博覧会をバネにして、進んでいくことになった。

・シカゴ・コロンブス万博（1893年）

鈴木政吉の次の飛躍は、シカゴ・コロンブス博覧会であった。この博覧会は「コロンブスのアメリカ大陸発見400年」を記念して1893年5月1日から10月30日までシカゴで開催されたもので、入場者が2700万人を超える大規模な万国博覧会だった。

日本では、このシカゴ・コロンブス万博に、東京音楽学校から楽器が出品されることが話題になっていたが、結局、輸送の問題で、東京音楽学校の出品の中にオルガンは入らなかった。山葉寅楠は運送料を自費で賄うので、出品してほしいと申し入れたが、博覧会協会に拒絶され、出品はかなわなかった。

一方、政吉のヴァイオリンは、軽くて小さいこともあって、音楽学校からの出品に入っただけでなく、政吉個人による愛知県からの出品としてシカゴに送られた。政吉は名古屋商業会議所のメンバーで、この博覧会に向けての愛知県出品同盟会幹事も務めていたので、こういう芸当が可能だった。鈴木ヴァイオリンは楽器の部で審査され、「すぐれた音質およびすぐれた技術と仕上がり」

が評価されて、賞を得た。

・第4回内国勸業博覧会（1895年）

その2年後、日清戦争直後の1895（明治28）年4月1日、第4回内国勸業博覧会が京都岡崎公園で開幕した。この博覧会は平安遷都千百年記念祭の一環として開催されたもので、第1回内国博以来、はじめて東京外での開催となった。

今回、楽器部門で、進歩1等賞に選ばれたものはなく、進歩2等賞に選ばれた唯一のものが、山葉寅楠のオルガンだった。一方、進歩3等賞に選ばれたのは、神奈川県西川寅吉のオルガンと愛知県の鈴木政吉のヴァイオリンだった。楽器全体に関する審査報告はかなり充実しており、西洋楽器については、前回に比べて一段と進歩しており、特にオルガンがそうである、と賞賛している。鈴木ヴァイオリンについては、製作は比較的良いが、価格が安くない。もっと安かったならば、1等賞にしても異論は出なかったであろうに、と述べられている。鈴木ヴァイオリンは当時、最も安いもので5円だった。小学校の先生の初任給の半額ほどだが、これを高いと評されたのである。政吉はこの後、大量生産による売価引き下げをめざして機械化を進め、最低5円だった値を2円にまで引き下げることになる。

・日本楽器製造株式会社設立と山葉寅楠の米国視察

鈴木政吉のヴァイオリン工場は昭和に入るまで個人経営であったのに対し、山葉寅楠は、1897（明治30年）10月、日本楽器製造株式会社を設立する。ここに、社名は日本楽器製造株式会社、ブランド名がヤマハとなった。

その1年半後、1899（明治32）年4月、山葉寅楠はアメリカの楽器事情を視察・調査するために文部省の嘱託として単身旅立った。このとき、寅楠は政吉からヴァイオリンを預かって、現地に赴いた。彼はホノルルを経て、5月29日にサンフランシスコに到着するが、たちまち税関でひっかかってしまった。政吉から預かったヴァイオリンの関税がいくらかわからないということで、税関で留め置かれたのである。6月2日、寅楠は通訳と共に税関にヴァイオリンを引き取りに行き、無税にしてもらおうとするものの、うまくいかず、出直

すことになった。その後、ようやく寅楠はヴァイオリンを受け取り、ニューヨークに送り、自身はサンフランシスコからシカゴを経由してニューヨークに向かった。当時、ピアノ・オルガン製造の中心はニューヨークとシカゴだったのである。寅楠はニューヨークでヴァイオリンを受け取るが、送料が高いことに驚いている。

寅楠はおよそ3か月あまりの滞米中、寸暇を惜しんで数多くのピアノ・オルガン工場を視察し、積極的に部品を購入した。大野木は寅楠が買い付けたものをまとめているが、ピアノ、オルガン、ピアノ・オルガンに共通する機械・工具類塗料などが、それぞれ3分の1ずつを占めている。ピアノはモデル用1台、オルガンはモデル用3台を購入し、そのほかに多額の部品を購入。なかでも、ピアノについては、YAMAHAのネーム入りのフレーム、アクション等、日本で自作できない部品を大量に買い付けた。また、寅楠はスミス社で多数の製造機械を購入し、さらには日本の競合他社に同種の機会が販売されないような契約まで締結している。そのように多忙な中で、政吉のヴァイオリンに関してはできるだけのことをしたようである。

・パリ万博（1900年）

1896（明治29）年1月、フランスから1900年パリ万博への参加を要請された日本政府は132万円という多額の予算を組んで臨んだ。今回、楽器に関しては、京都から楽器の弦、名古屋からは小林倫祥の雅楽の楽器と鈴木ヴァイオリンだけが出品された。出品カタログには浜松から日本楽器製造のオルガンが出品物として掲載されているが、実際には出品された様子はない。寅楠が1899年にはアメリカに視察に行っていたために、出品できなかったのかもしれない。鈴木政吉のヴァイオリンについては、弦楽器のセクションで審査が行われたが、選外佳作を得たにとどまった。

・国産ピアノ第1号誕生

1900年1月末、山葉寅楠がアメリカ視察の際に買い付けた材料が日本に届くと、それを使って下半期にアップライトピアノを製作。これが、響板を自前で作ったことから国産ピアノ第1号とされている「第1号カメンモデル1001

番」である。

翌年、日本楽器は文部省、農商務省の両省にピアノを納入した。これは日本楽器と官公庁の緊密な関係を物語っているが、同時に官公庁の日本楽器に対する期待も読み取ることができる。さらに、1902（明治 35）年には、グランドピアノの第 1 号が完成し、宮内省に納入された。同年、教育及び工業上の功績に対し、山葉寅楠に緑綬褒章が授与されている。

しかし、日本楽器におけるピアノ製造は順風満帆で進んだわけではない。それはこの会社のピアノ生産台数を見ればよく分かる。1900（明治 33）年にわずかに年産 2 台、1901（明治 34）年に年産 6 台、1902（明治 35）年に年産 8 台、と微々たる伸びで、生産量が三桁の 117 台に達するのは、1907（明治 40）年のことである。

その間、山葉寅楠は高弟と共に、夏の汗がピアノ線に落ちるのを嫌って、昼夜転倒の生活を続けながら、ピアノ製造の研究に取り組んだ。しかし、ピアノの製造が軌道に乗り出してからは、山葉直吉と河合小市という二人の弟子に現場を任せるようになった。

山葉直吉（1881-1938）は旧姓尾島、1892（明治 25）年 11 歳で入社した。実父の尾島弥吉は三味線の名手で、寅楠はオルガンの音色と音程に関していつも相談していた。直吉は寅楠の高弟としてピアノ作りに携わり、初代ピアノ部長となった。1903（明治 36）年、寅楠の姪春子と結婚して、山葉直吉となった。門下から多くの優秀な技術者を輩出した。

一方、河合小市（1886-1955）は後に、河合楽器製作所を創業することになる人物である。車大工の息子として生まれ、天性の手先の器用さとひらめきをもっていた。1896（明治 29）年、小学校 4 年を卒業したばかりの小市は入社し、みるみる頭角を現していった。1906（明治 39）年、河合小市はピアノアクションを完成する。日本楽器製造ではピアノ各部品の内製化を進めていたが、自社製のオリジナルアクションを開発したこと意味は大きかった。

山葉寅楠のモットーは純国産主義で、「私はオルガン製造を志してから、いまだに一人の外人も雇わず、一回も外人の教えを受けず、独力で幾多の困難を経て今日の基礎を固めた」と『音楽雑誌』（1896（明治 29））の中で述べている。それはピアノ製造においても一貫しており、アメリカから機械や部品は買

い付けても、外人技師を雇おうとはしなかった。

・第5回内国博覧会（1903年）

日露戦争の前年、1903（明治36）年3月1日、大阪の天王寺で第5回内国勸業博覧会が開催された。この博覧会はこれまでの内国博の規模を大きく上回り、入場者数も激増した。また、外国の参加、植民地展示、多数の余興の挙行など、それまでになかった要素が加わった。

今回、「西洋楽器及びその付属品」の部門には107点が出品され、そのうち69点が楽器だった。日本楽器製造はピアノ部門で2等賞、オルガン部門で1等賞を受賞した。

ピアノの出品は全4点、うち3点は日本楽器の出品で、グランドピアノが1台、アップライトが2台だった。審査報告書ではいずれも「製作堅牢、形容端麗」であるとされ、グランドピアノについては、値段が350円と安く、「音調雅正、音量円満」で、ほとんど非難すべき点がない優れた品であるが、アップライト2台については、音響が少々劣ると評価されている。オルガン部門には31点の出品があり、日本楽器が1等賞を得た。「製作している各種オルガンは外国品多数のものに譲るところがないところまで来ている。国内外で需要が日ごとに増しているのも当然である」という評である。日本楽器に次ぐ西洋楽器工場であった横浜の西川虎吉は、この博覧会には出品していない。息子の安蔵はアメリカで修行中で、まだ帰国していなかったのも、それが不参加の理由だったのかもしれない。

しかし、オルガン部門での日本楽器の1等賞は明らかに別格であった。第5回内国博覧会では、楽器部門は、本邦楽器、西洋楽器、明清楽器の3部門に分かれていたが、その中で、1等賞を得たのは日本楽器のオルガンだけだったのである。

2等賞には、日本楽器の出品したピアノと東京の松本新吉が出品したピアノのほかに、鈴木政吉のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが入っていた。鈴木政吉が受けた2等賞はヴァイオリン部門としては最高位だったが、その翌年、1904年、アメリカのセントルイスで万国博覧会が開かれた際、政吉は出品することができなかった。従来、万博への出品希望者が多すぎて、絞り込みに苦

労していた政府は、今回の出品方針で、それぞれの部門に出品できるのは、第5回内国勸業博覧会の1等賞のみと決めてしまったからである。そのため、鈴木政吉はセントルイス万博へ出品する道を最初から閉ざされてしまった。一方、日本楽器製造、すなわち山葉寅楠の風琴は第5回内国勸業博で1等賞を受賞したため、出品が可能だった。出品できなかった鈴木政吉の無念は容易に想像できる。

・セントルイス万博（1904年）

セントルイス万国博覧会は、アメリカによるフランスからのルイジアナ購入の100周年を記念し、1904（明治37）年にセントルイスで開催されたもので、世界44カ国から約2000万人が参加、1900年パリ万博の4倍の土地に1500以上の展示用建設物が作られ、それまでで最大規模の万博となった。日本政府は日露戦争中であつたが、積極的にこの万博に参加し、従来万博に出品していた美術工芸品に加えて、教育制度に関する展示や工業製品も数多く出品し、近代化の進む社会を印象付けようと試みた。

日本楽器製造はグランドピアノA1号とオルガンを出品した。ちなみに楽器を出品したのは日本楽器製造だけで、ピアノ、オルガンとも名誉銀牌を受賞した。大野木によれば、非欧米人による初の受賞が物議をかもしたという。

『ミュージック・トレード』誌による批評によれば、「ヤマハのグランドピアノは小ぶりで、音域は7オクターヴである。音色はやせていて、アメリカ人の耳にはつまらないが、不快ではない。ケースは黒く塗られ、磨かれている。横の面には金色で日本の装飾がステンシルで書かれている。その他の点では、オルガン同様、この国で作られた、楽器のもののまねの模倣品である」（*Music Trade Review*, 1904.10.1.）とある。

・東京勸業博覧会（1907年）

第5回内国博覧会の後、政府は日本大博覧会と称する万国博覧会を開くことを検討しはじめたが、結局中止となった。一方、その間に、東京府は独自の博覧会の開催に向け準備を進め、当初予定していた東京府工芸共進会を東京勸業博覧会と改称し、第6回内国博の開催予定年であつた1907（明治40）年に

東京の上野公園で開催し、680 万人もの入場者を集めた。20 世紀初頭の東京府はすでに内国博レベルの博覧会を開催する力量を有していた。

さて、東京勸業博覧会では、東京府内と府外が区別された。楽器の部門では、東京府内の部では、2 等賞に松本新吉のオルガンが入っている。一方、府外では、静岡県の子葉寅楠のオルガンが「紀念名誉銀賞」を受賞し、国内の需要を満たすだけでなく、海外まで販路を広げていることが賞賛されている。「紀念一等賞」には、子葉のグランドピアノ、鈴木政吉のヴァイオリン、そして神奈川県の子川虎吉のピアノとオルガンが入っている。

・シアトル・アラスカ・ユーコン太平洋博覧会（1909 年）

アラスカ・ユーコン太平洋博は 1909（明治 42）年アメリカのシアトルで開かれた博覧会である。370 万人が来場したが、国外から参加したのは日本とカナダだけであった。

このうち、楽器部門では、日本楽器製造が出品したアップライトピアノとオルガンがそれぞれ名誉大賞金牌を受賞し、一方、鈴木政吉が出品したヴァイオリンも金牌を受賞した。ピアノは梨子地塗であった。

シアトルは当時、アメリカの太平洋岸でも、もっとも排日運動が激しかった都市で、排日の空気が街中に溢れていた。しかし、日本陳列館が開館すると、そのすぐれた内容を見て、対日感情が好転したという。

日本から出品された 6679 点のうち、もっとも多かったのは陶磁器の 1361 点であり、楽器を含むセクション「楽器、体育具、理医学用機械、文房具」は 89 点だった。国際審査員には、日本から 16 名が参加したが、楽器の審査には加わっていない。それだけに一層、日本楽器製造のオルガンとピアノ、そして、鈴木ヴァイオリンの受賞が光る。

今回のシアトル万博でも、鈴木ヴァイオリンは外国製品を作り替えているという風説が流れ、織田事務官等は、その説明に苦心したと 10 月 23 日付の『名古屋新聞』で報じられている。

この博覧会に出品するにあたって、子葉寅楠と鈴木政吉が共同で準備していたことが、寅楠の手帳の記載からわかる。それによれば、寅楠は 1909（明治 42）年 1 月 28 日、東京で開かれたユーコン米国博覧会に赴き、楽器展示用

の場所を請求。2月9日、名古屋で政吉を呼び出し、博覧会の相談。展示等は寅楠に一任されることになった。翌週の2月16日 寅楠は東京の農商務省に赴き、陳列の図面を提出。2月19日、ユーコン博での陳列の一等地を、変更代金なしで手に入れる。「鈴木政吉氏を呼び、話せば大歓喜なり」とある。さらに、3月18日、ユーコン博陳列所、高さ2,5間、広さ2間×8間、借用料85円80銭という記載がある。

・第10回関西府県連合共進会（1910年）

1910（明治43）年に名古屋市で開かれた第10回関西府県連合共進会は、名古屋開府300年にあたることから、名古屋市は鶴舞の敷地1万坪を無償で提供し、大規模な準備を進めた。そのため、「共進会」とはいえ、3府28県が参加する大規模な博覧会となり、90日間の会期中、来場者は260万人に達した。

楽器・楽譜の部類で、日本楽器製造のオルガンとアップライト、鈴木政吉のヴィオラがそれぞれ1等賞を受賞している。政吉の出したチェロとヴァイオリンは2等賞、コントラバスとマンドリンが3等賞に入賞した。山葉寅楠率いる日本楽器製造と鈴木政吉は、いまや博覧会入賞の常連になっていた。上原六四郎は審査報告で、洋楽器が近年長足の進歩をなしたと評価し、鈴木政吉は山葉寅楠と共に楽器製造人の好模範というべし、と述べている。

・日英博覧会（1910年）

名古屋で第10回関西府県連合共進会が開かれていたのとほぼ時を同じくして、ロンドン西郊シェパズ・ブッシュのホワイト・シティで日英博覧会が開催された。会期は5月14日から10月29日までの約5か月半であった。日英博覧会は万国博覧会などの国際博覧会とは異なり、日英二カ国の共催で、実質的にはイギリスにおける日本博覧会という色彩が強かった。日本はイギリスのおよそ2倍を出品し、日本庭園を造り、柔術や相撲、祭りその他のイベントを企画し、さらに、日本古美術のコレクションの展示も非常に充実していた。

今回、日本から楽器部門に出品したのは、東京の松本楽器、浜松の日本楽器、名古屋の岡野善吉、鈴木政吉、大阪の高野幸助、植村小七で、和楽器と洋楽器

が展示された。審査の結果、日本楽器製造株式会社と鈴木政吉が名誉大賞を得た。オルガンとピアノを出品した日本楽器と、弦楽器 28 点、56 個を出品した鈴木政吉が名誉大賞を受けたことは画期的なことだった。ちなみに、ピアノは七宝蒔絵仕上げだった。

実は日英博覧会では、アラスカ・ユーコン博覧会の時と同様に、日本楽器と鈴木ヴァイオリンは同じブースに出品していた。政吉は日英博覧会愛知出品同盟会常務委員を務めていた関係で、ほか四人と共に渡英した。政吉は「文部省囑託」という肩書きを得て、1910 年 3 月に敦賀港を出発し、4 月 10 日にロンドンに着き、イギリス各地、フランス、イタリア、オーストリア、ドイツ、ベルギーを視察して、8 月 1 日ロンドン発、シベリア鉄道を使い、同月 17 日に敦賀に着き、18 日の午後、名古屋に戻った。

その際、山葉寅楠は鈴木政吉に委任状を渡し、英国の楽器商、およびドイツのピアノ線の製造会社との交渉を依頼していることが注目される。その中で、寅楠は「今回の出品は特に販路を拡張し、実利を収めることが目的である」とはっきり述べ、具体的な取引条件を提示している。それによれば、英国の「最も信用ある」楽器商に対しては以下の内容だった。すなわち、ピアノ、とオルガンの一品あるいは二品について 1,500 ポンド以上注文するならば特約販売者とすること。販売区域は英本国とアイルランドで、英領は含まない。割引は定価の 3 割 8 分。船便の代金は折半。2 年契約で、1 年半経過した時点で契約の延長・解除を協議する、というものである。

一方、ドイツのピアノ線の製造会社に対しては、日本楽器が特約販売する条件を以下のように示している。すなわち、品質は最優等で最低価格、販売区域は日本と日本の領土、2 年契約で、1 年半経過した時点で契約の延長・解除を協議する、注文高は 1 年につき何千何百円を下回らないこと、というもので、数量を交渉できるようになっている。

大野木によれば、日本楽器については、その契約が結局どうなったのかは不明だが、政吉は訪英時にロンドンのマードック商会とヴァイオリン輸出の特約を結び、その 4 年後に始まった第 1 次世界大戦の際の輸出ブームのきっかけを作ったという。寅楠、政吉ともに、日英博覧会を販路拡張の機会として捉え、現地の楽器商やメーカーと交渉していたのである。日英博覧会が開かれていた

1910（明治43）年、山葉寅楠は共益商社を買収に踏み切り、自立した楽器メーカーとして世界を視野に入れて活動をさらに活発化させる。

4. おわりに

こうして、日本楽器製造、鈴木ヴァイオリンともに、1910（明治43）年の段階で、すでに世界戦略をめざす企業になっていた。日本における洋楽そのものの受容よりもはるかに早く洋楽器生産は発展し、メーカーは非常に速い時期から海外進出に積極的だった。

鈴木政吉にとって、山葉寅楠率いる日本楽器製造が色々な意味で手本になったことは確かである。鈴木政吉は1899（明治32）年から翌年にかけて、ヴァイオリン工場に機械の導入を図った。国内で比較的安い輸入品が出回るようになり、さらに、名古屋の職工賃金が値上がり気配であることから、従来の手工のみでは勝ち目がない、と考えたからである。そのため、彼は横浜や神戸などの商館に問い合わせ、さまざまな機械のカタログを探したが、一向にらちがあかず、仕方なく自力で開発した。筆者はこれまで、政吉がなぜ外国にヴァイオリン製造用の機械があると考えたのか不思議に思っていたが、寅楠を見習ったと考えれば納得がいく。当時ピアノ生産のピークを迎え、機械化が進んでいたアメリカから、日本楽器製造は最新の機械設備を取り入れていた。

本稿で見たように、山葉寅楠と鈴木政吉はともに輸出を念頭に置いて、洋楽器の量産を図ったアントレプレナーであり、二人はまさしく「持ちつ持たれつ」の関係だったのである。

主要参考文献

[博覧会関係資料]

第三回内国勸業博覧会事務局『第三回内国勸業博覧会出品目録』（1890）

第三回内国勸業博覧会事務局『第三回内国勸業博覧会審査報告』（1891）

第四回内国勸業博覧会事務局『第四回内国勸業博覧会審査報告』（1896）

第五回内国勸業博覧会事務局『第五回内国勸業博覧会出品審査概況』（1903）

第五回内国勸業博覧会事務局『第五回内国勸業博覧会事務報告』（1904）

農商務省『日英博覧会受賞人名録』（1910）

農商務省『日英博覧会事務局事務報告』（1912）

Official Report of the Japan British Exhibition 1910 at the Great White City, London, Unwin
Brothers, 1911

[楽器業界誌]

The Music Trade Review (New York, 1878-1956) 1880 年 -1933 年 Web 上 で 公 開 (The
International Arcade Museum によるプロジェクト)

The Presto (Chicago, 1884-?1941) 1920 年 -1941 年 Web 上で公開 (The International
Arcade Museum によるプロジェクト)

[二次資料]

井上さつき 2014 『日本のヴァイオリン王——鈴木政吉の生涯と幻の名器』中央公論新社

大野木吉兵衛 1977 「浜松地方における洋楽器産業の変遷」浜松史蹟調査顕彰会編『遠州
産業文化史』所収

大野木吉兵衛 1978 「山葉寅楠の手帖」浜松史蹟調査顕彰会『遠江』第 2 巻所収

大野木吉兵衛 1997 「明治末葉における日本楽器製造（現ヤマハ）株式会社要人の動静」『遠
江』第 20 巻所収

「国産ピアノの創業とその発達を語る」『音楽世界』1936 年 11 月

武石みどり監修 2007 『音楽教育の礎——鈴木米次郎と東洋音楽学校』春秋社

東京商業会議所 1904 『保護政策調査資料』第 1 集

永山定富編 1928-34 『海外博覧会本邦参同史料』（第 1 編～第 7 編）博覧会倶楽部

前問孝則・岩野裕一 2001 『日本のピアノ 100 年——ピアノづくりに賭けた人々』草思社

山葉寅楠、大野木吉兵衛解題 1988 『渡米日誌』浜松史蹟調査顕彰会、遠州資料叢書 6 "